

善行に対する警告と奨励 (2)「祈り」

【聖書箇所】 マタイの福音書 6章 5～8 節

ベレーシート

●ユダヤ人たちが大切にしていた三つの宗教的善行があります。

- (1) 施し・・・人に対する行為
- (2) 祈り・・・神に対する行為
- (3) 断食・・・自分に対する行為



●今回は、神に対する善行としての「祈り」が取り上げられています。「祈り」のタブレットは、9～13 節の「主の祈り」も含まれていますが、今回はそれについては扱いません。この「主の祈り」はきわめて簡潔でありながら、その内容はきわめて深遠という、「天の御国」の成就のための祈りなのです。ですから、この部分は次回、特別に取り上げたいと思います。今回は 5～8 節に限って取り上げます。

【新改訳改訂第3版】 マタイの福音書 6章 5～8 節

- 5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。
- 6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。
- 7 また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。
- 8 だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。

●ここでイエシュアが警告していることは、「祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。」(5 節)、「彼らのまねをしてはいけません。」(8 節)ということです。祈りそのものを否定しているのではなく、私たちが陥りやすい誤った祈り方を警告しながら、御国の福音の光に照らした真実な祈りをするようにと勧めているのです。今回は、5～8 節の中から二つのことを取り上げたいと思います。ひとつは、「真実な祈りは隠れた生活の中にある」ということ。もう一つは、「私たちの神は私たちが祈る先に必要なものをよく御存じである」ということです。

1. 真実な祈りは隠れた生活の中にある

●祈りは神を相手にすることだというのは一見当然のことのように思えます。ある人は、「すべての祈りは神にささげられている」と言うかも知れませんが、必ずしも神に対してなされていない場合もあるのです。当時のユダヤ人は一定の公の祈りの時間があり、朝の九時と午後三時の時間は神殿(主の宮)に行って祈ったようです。過越の祭りから 50 日目はユダヤ教では「五旬節」と言い、主の定められた例祭として大勢の人々がエルサレムに集まっていた。イエシュアの弟子たちも一つ所に集まっていた(使徒 2:1)。すると突然、天から激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡り…聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話し出したという聖霊降臨の出来事がありました。この出来事に遭遇した人々はみな驚いて、互いに「いったいこれはどうしたことか。」と言う者もあれば、「彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ」と言ってあざける者たちもいたのです。そこで使徒ペテロは他の使徒とともに立ち上がり、こう言いました。「今は朝の九時ですから」と。つまり「酔っているのではない」とペテロは言いたかったのですが、その時は「朝の九時」、つまり「今は祈りの時間だから」とも言いたかったのだと思います。

●上記の話は使徒の働き 2 章に記されていますが、3 章 1 節には次のように記されています。「ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。」と。原文では「第九時」となっていて、朝の六時を第一時としてその第九時ですから、午後三時ということになります。つまり、朝の九時と午後三時は、ユダヤ人にとって公の祈りの時間だったのです。

●より敬虔なユダヤ人の場合は、さらにもう一回、つまり正午にも祈ることを習慣としていたようです。ところが、その祈りの時間になると、宮ではなく、町の広場や街角などにわざわざ出向いて行って祈りをささげる人たちがいたようです。祈りの姿勢も、「首を下に向けたまま手を V 時型に手を挙げて祈る」のもあれば、「ひれ伏して祈る」のもあったようです。ともかく、自分が神に対していかに敬虔深い者であるかということを示したかった者たちがいたということです。ですから、イエシュアはこう言っています。「祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」(6:5)と。「すでに自分の報いを受け取っている」ということは、彼らが神からの報いを受けてはいないということなのです。祈りが祈りになっていない、つまり、祈っている祈りが神に聞き入れられていないということです。その祈りの内容がどんなにすばらしいものであったとしてもです。

●イエシュアがここで問題としているのは、「人に見られたくて」ということです。「施し」の場合は、「人にほめられたくて」(6:2)でした。いずれもここでの「人」は複数形です。表現が少々異なっていますが、言わんとしていることは同じです。つまり、宗教的な善行が人や神に対する純粋な行為ではなく、常の人からほめられ、注目されるための行為だということなのです。この行為をイエシュアは偽善だと言っているのです。「偽善」とは舞台俳優がする「演技そのもの」だという意味です。偽善の祈りの過ちは、祈りの先におられる神に関心があるのではなく、祈っている自分自身に注意が向けられていることにあります。それは祈りのように見えて、祈りになっていないということです。そこでイエシュアは偽善者たちを断罪

するだけでなく、6～8節において、真の祈りがいかなるものであるかを弟子たちに教えようとしています。その教えのポイントは以下の通りです。

- (1) 祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。
- (2) 戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。
- (3) 祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。

●「祈り」というと、神に向かって何らかのことばを口から発するというイメージが強いと思います。しかしここでひとつ断っておかなければならないことは、祈りとは「神との交わり」を表わす総称的表現であるということです。ですから、ことばになる祈りもあれば、ならない祈りもあるということです。むしろ祈りは、神と親しく個人的に交わっているかどうか問われるのです。

●聖書の中には、祈りを表わすさまざまな表現があります。例えば、ダビデという人は「私はいつも、私の前に主を置いた」(詩篇 16:8)という言い方をしています。これは祈りの本質を表わしているように思います。そこから、「主を仰ぎ見る」(詩篇 34:5)とか、「主を尋ね求める」(詩篇 119:2)とか、「主を待ち望む」(イザヤ 30:18)とか・・・などなど。新約的表現では「神に近づく」(ヤコブ 4:8)とか、「主にとどまる」(ヨハネ 15:4)・・・これらはみな祈りの生活を表わす表現です。

(1) 個人的な祈りの生活の重視

●6章5節では「あなたがた」と複数で語られていましたが、6節からは「あなたは」に切り換えられ、単数形で語られています。原文だとそれが明確です。「あなたが祈るとき」「あなたの奥の部屋に」「あなたが入って行き」「あなたの戸を閉め」「あなたの父に」「あなたは祈りなさい」と、「あなた」という個人が強調されています。神に対する祈り(祈りの生活)は、公である前に、きわめて個人的な営みであることが強調されています。ちなみに、7節から再び複数形となり、公の共同体的な祈りとなります。

(2) 隠れた祈りの生活の習慣

●「戸をしめて」とあるのは、祈りのための特別な部屋を用意しなさいということではありません。むしろ、他の一切のものから隔離されるような時や場所であればそれで良いのです。祈りとは神(御父)との一対一の親密な交わりですから、一人になることが必要です。一人になって淋しいという思いに駆られるのは、祈りの生活が確立されていないからかもしれません。ドイツのナチに敢然と立ち向かった牧師のボンフェッファーは、『共に生きる』という本の中で「ひとりになること」について、次のように述べています。「ひとりであることのできない者は、交わりに入ることを用心しなさい。交わりの中にいない者はひとりであることを用心しなさい。・・・ひとりである日がなければ、他者と共なる日は交わりにとっても、個人にとっても、実りのないものとなる。」と。

●主との親しい交わりを深めるためには、静まること、沈黙することが大切です。じっと静まれる場、神の御前に耳を澄まして待ち望む姿勢がとれる場所が必要です。生活のテンポの速さ、息つく暇も与えない活動、人との交流や奉仕などから身を隠して、一人になって静まりと沈黙の時を過ごす時が必要です。喧騒に満ちた時代だからこそ、一人になることの大切さ、日ごとの黙想、瞑想の時間が大切にされなければなりません。特に、朝のみことばの前における沈黙は一日の全体に大きな影響を与えます。

●また、祈りは一方的に神に話すことではありません。むしろ反対に神のことばに耳を傾け、それを心で味わい、瞑想することも祈りという営みに含まれるのです。むしろこうした祈りは、ことばになる時であれば、ことばにならない時もありますが、いずれにしても、神との親密な交わりは第三者の介入を許さないのです。

●「隠れて祈る祈り」は、必ずや祈りのしるしが外に現われてくるものです。詩篇 34 篇 5 節には「彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた」とあります。神の人モーセも 40 日 40 夜、人々から離れて、シナイ山において、神との交わりを持ちました。そのモーセが山から降りて来た時、人々が恐れて近づけなかったほどに、彼の顔は光を放って輝いていたとあります。モーセは自分の顔が光り輝いているとは思っていませんでした。同様に、人が「私は何時間、祈っています」と言わずとも、祈っている人全体には光(「オーラー」 אֹרֶל)が輝いているものなのです。私たちが「オーラー」を放つような隠れた祈りの生活をしたいものです。

(3) 簡潔な祈りを心がける

●イエシュアは、「祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。」と言われました。これを単に長々と祈らなくても、短い祈りでいいのだと思わないでください。短く、的を射たことばで簡潔に祈るというのは、かなりの祈りの達人なのです。その域に達しない祈りとは、人にも分かるようにとの思いから説明的な部分が多く、結局のところ、長い祈りとなってしまうことが多いのです。神に対しての祈りは説明的な部分は不要です。簡潔に祈ることによって、より交わりが研ぎ澄まされることになるように思われます。

●さらに、このことばが意味することは何でしょうか。「同じことばを、ただくり返す」祈りです。たとえば、バアルの預言者たちが朝から昼過ぎまでバアルの名を狂ったように叫びつづけましたが、バアルからの祈りの答えはありませんでした。ところが北イスラエルの預言者エリヤが祈った祈りは即座に聞かれたのです(Ⅰ列王記 18:25~40)。「異邦人の祈り」は、ことば数が多ければ聞かれると思っているのです。しかしそれはイエシュアが教えている「祈り」ではありません。聖書の祈りはどんなに多くとも、本腰入りの祈りは「三度」と相場が決まっているのです。死んだ子どもを生き返らせたエリヤの祈り(Ⅰ列王記 17:21)、ゲッセマネでのイエシュアの祈り(マタイ 26:44)、一つのとげを去らせてくださいと祈ったパウロの祈り(Ⅱコリント 12:8)などです。ちなみに、聖書の「三回、三度」は神のみこころを確証する数です。

●神に受け入れられる祈りは神のみことばに基づいた祈りであり、神のことばの力を信じて祈る祈りです。自分の思いや願いを通すための祈りではありません。効かれる祈りとは、言葉数とは無関係なのです。聞かれる祈りは神のみこころにそった祈りです。ですから、神のみこころを知るために、みことばに親しみ、みことばを日々心の内にたくわえておく必要があるのです。

●私が神学校で学んでいたとき、牧会学の先生が次のように言っていたのを思い出します。
「クリスチャンが1日に3分でも、主の御顔を仰ぎ見ることができたら、その人は確実に変化して行く。」この言葉は、「3分でも主の臨在を感じるができるなら」という意味です。結構、簡単なことのように思えます。ところが、この3分間の臨在を経験するためには、祈りの生活の訓練がたくさん必要であるということを後で気づかされるのです。イエシュアは弟子たちに言われました。「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない。」と。皮肉にも、このイエシュアのことばを真に理解するのは多くの不毛な生活を経験した後であることが多いのです。

●このように、「祈り」が神との交わりであるならば、祈りの生活を私たちは身に着けなければなりません。個人の祈りの生活を建てるためには神のみことばが必要です。なぜなら、そこには神のご計画やみこころ、みむね、目的が記されているからです。聖書を読むことなく祈るならば、おのずと自己中心的な祈りに傾き、不毛なクリスチャンライフを送ってしまう結果となるのです。ですから、イエシュアは「だれでも(例外なく)、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。」と警告しています(ヨハネ 15:6)。

2. 神は祈りの前の私たちの必要をよく知っておられる

●今回のテキストの最後の節である8節の「だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」ということばの意味するところを考えてみましょう。

●「彼らのまね」とは異邦人の祈り、つまり神を知らない者たちが祈る祈りのことです。その祈りとはことば数を多くして要求を繰り返すことによって神に波状攻撃をかければ、神もへきへきして根負けしてしまい、私の要求を聞いてくださるだろうと考える祈りです。その例の代表的なものが「お百度参り」でしょう。神社やお寺の入口から拝殿・本堂まで行って参拝し、また入口まで戻るということを百度繰り返す祈りの形態です。百度参りの祈願の内容は、多くは個人的なものであり、その内容が切実なものである場合に、一度の参拝ではなく何度も参拝することでより、心の願いが成就するようにと願う行為です。そのようなまねをしてはならないとイエシュアは命じています。なぜならば、「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」とイエシュアは語っておられます。

●祈りについての教えはこの箇所だけでなく、他にも(例えば山上の説教の 6:31~34、7:7~11)あります。しかし 6 章 8 節の「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」という場合、コンテキストの関連から考えるなら、あくまでも「祈りにおいてあなたがたに必要なもの」と解することができます。とすれば、それはいったい何なのでしょう。人称も「あなたがた」と二人称複数になっていますから、個人の必要というよりも、一般的な事柄と言えます。

●その答えはズバリ、「聖霊」という賜物です。この聖霊の助けによるならば、「異邦人のように同じことばを、ただくり返して」祈るような祈り方はしなくなるということです。この聖霊のことを、使徒パウロは「神を知るための知恵と啓示の御霊」という表現をしています(エペソ 1:17)。この御霊が与えられるように祈らなければなりません。この御霊によって、私たちの心の目がはっきりと見えるようになります。ですから、この御霊が私たちに豊かに注がれることを求めるのです。なぜなら、この御霊こそ私たちのうちに、

- ①神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、
- ②聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、
- ③神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるか

を知らせてくださるからです(エペソ 1:18~19)。これらの内容はみな終末論的な祝福です。つまり、クリスチャンの視点からだと「キリストの再臨」によって、ユダヤ人の視点からだと「メシアの来臨」によってということになりますが、いずれも、主の主権によってやがて訪れる終わりの日の事柄にこそ、目を留めることが祈りの生活と言えます。すでに私たちは御霊という神の賜物を受けていますが、信じる者に約束される祝福を見、また体験できるのは、この世においては手付金程度なのです。その全貌が与えられることを待ち望む祈りは、次の「主の祈り」を祈る力となるのです。神のなさろうとすることに関心を抱き続けることが、祈りの真の目的なのです。その確信が隠れた祈りの生活の中で、より確かなものとなって行くことができるように祈りましょう。

2017.7.30